

微笑と哄笑の個人間相互作用

細馬 宏通 (滋賀県立大学人間文化科学研究科)

1. はじめに

笑いは、笑い手の情動を示すだけでなく、発語のタイミングと関係することによって、参与者どうしの親密さの達成や、トラブル語りの受容/拒否に深く関わっていることが、会話分析の分野で明らかにされてきた (Jefferson 1979, Jefferson et al. 1987).

しかし、扱われている笑いは、もっぱら発声を伴う哄笑 laughter に限られており、微笑 smile はほとんど扱われてこなかった。

微笑は、哄笑と同じ「笑い」のひとつではあるが、名の示す通り微弱な笑いであり哄笑の弱められたものである、という証拠はない。

微笑と哄笑とは、そもそもモダリティが異なる。哄笑には音声に伴うのに対し、微笑には音声は伴わず視覚的な表情のみが表れる。哄笑の音声には、特定の相手を指す性質が希薄なのに対し、笑いの表情は、笑いを浮かべている顔の向きを伴い、受け手を強く指定できる。

では、こうした微笑の特徴は、じっさいの会話の中でどのような現象をひきおこすだろうか。

本論では、微笑という視覚的な笑いが、哄笑という音声を伴う笑いとのような相違点を持つかについて、実際の相互作用を分析することで考察する。取り上げる事例は少数だが、参与者全員の表情と行動の連鎖を詳細に分析することで、哄笑とは異なる笑いの現象を提示することができるだろう。

2. 微笑の定義と方法

2.1 微笑・哄笑の定義

本研究では、微笑の微細な区別には立ち入らず、口角付近の上昇、頬骨位置の変化、目周辺の変化を伴う、発声を伴わない笑いの表情を一括して「微笑 smile」と名付けることにする。また、本研究では、微笑のタイミングにもっぱら焦点をあて、Kendon (1967) の行ったような微笑みの度合い評価は行わないことにする。

声をあげる笑いは「哄笑 laughter」と呼び、「笑い」という場合は、哄笑と微笑の総称を指すものとする。

哄笑のトランスクリプトは、Jefferson (1979) の記述スタイルに従った。笑いについては、哄笑のみに注意し、できるだけ呼気音のタイミングに忠実に記述した。微笑のトランスクリプトについては、独立の微笑みを「」空白の波線下線で示し、発語中の微笑みを「こんにちは」

のように波線の下線をつけて示した。視線と微笑の関係を論じる場合は、Goodwin (1981) の視線記譜法に従って視線の方向を表した。

【記述例】

X への微笑: X ~~~~~ あんな:

X への視線: X —————

視線がある点からある点に移動中:

2.2 事例収集の方法

発話と微笑の関係を分析するには、各参与者それぞれの表情をとらえた映像と音声データが必要となる。本研究では、三人の大学生 (女性3人) が、個人の部屋で雑談をしている風景を3台のビデオカメラで撮影し、その会話の中から笑いの起こった場面をピックアップする方法を採った。3人の配置は以下の通りである (図1)。

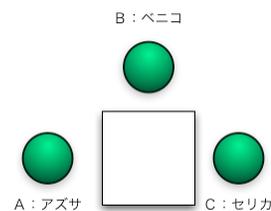


図1 アズサ (A)、ベニコ (B)、セリカ (C) の配置図

3. 微笑と哄笑の比較

3.1 微笑による招待と受容

わたしたちは、ただ微笑するだけでなく、互いに「微笑み合う」。Jefferson (1979) は哄笑の研究で、相手の笑いに対するすばやい受容/拒否が起こることを示したが、二者の微笑み合いにも、これと似た関係が見取れる。まず、笑いに対する受容と拒否の事例を見ながら、微笑みと哄笑の共通点は何か、異なる点は何かを考えてみよう。

【断片1: あたしとセリカ】

アズサ、ベニコ、セリカの三人がお菓子を開けて黙って食べている。開始時点で、アズサは手に持った菓子を、セリカはアズサを、ベニコは下を見ている。

(2.5)

C: A ~~~~~

A: (0.4) C あたしとセリカ =

断片1では、セリカのアズサに向けた微笑に0.4秒遅れて、アズサがセリカに向かって視線を向けつつ微笑みながら「あたしとセリカ」と発語する。

単純な例だが、ここには微笑の持つ、哄笑と共通の性質が見て取れる。

セリカの微笑みには、発語が伴っていない。このことから、アズサは、セリカの発語内容のおもしろさに笑ったのではなく、むしろセリカの微笑に対して反応して微笑したと考えられる。

哄笑の場合、話者がまず哄笑することで聞き手を招き、その直後に聞き手が笑うことが多い(Jefferson 1979)。断片1もまた、セリカの微笑みが先行し、続けて聞き手が微笑んでいる点で、哄笑がしばしばとる相互行為の形式に似通っているように思える。

しかし、いっぽうで、この微笑には、哄笑とは異なる性質がある。Jeffersonの記述している哄笑では、話者の発語の認知点 recognition point 付近が笑いのターゲットとなることが多く、認知点で笑いが起きない場合は、話者のさらなる発語によって笑いへの招待が試みられている。これに対し、断片1の微笑には、先行する発語が見あたらない。微笑は、しばらく沈黙があった後、新たな話題の始まる前に起こり、それに相手に応じている。こうした現象は他の場面でも見られる。

【断片2: 「かてきよ」】

アズサの携帯電話が鳴り、アズサは電話を耳にあてて応対を始める(1行目)。この時点でアズサ、ベニコは下を向き、セリカはアズサを見ている。

- 1 A もしもし
- 2 (2.5)
- 3 C ((飲み物を飲むゴクリという音))
- 4 (0.5)
- 5 A [(C) ~~~~~]
- 6 C [(0.3) ° かて(A)きよ? ° ~~~~~]

アズサは5行目でセリカに視線を移して微笑する。これに対し、セリカは「かてきよ(家庭教師)?」と、アズサの電話の相手を推察する発語をするとともに、アズサに微笑する。

ここでは、5行目のアズサの微笑の前に長い沈黙がある。3行目にはセリカが大きな音で飲み物を一口飲んでいるので、あるいはそれが微笑の原因になっているかもしれない。

しかし、5,6行目ではセリカの喉鳴らしは言及されていない。哄笑の場合、笑いのあとに、先行する発語の評価を導くことが多い(Jefferson 1979)が、ここでの微笑はむしろ、笑いのあとに新たな連鎖が始まっている

ように見える。

3.2 微笑と発話の並行

さらに、哄笑と微笑とのあいだには、音声と視覚の違いによってもたらされるもうひとつの相違点がある。それは、重複に対する許容度の差である。

ここに挙げた2例では、微笑はコンマ数秒ずれており、発語のあいだ、お互いの微笑が続いている。

哄笑は音声を伴うため、発話と同時に発せられると、発話の内容を打ち消してしまうおそれがある。じっさい、一人の発話にもう一人の哄笑が重複した場合、そのあとには発語どうしが重複した場合と同じような修復過程を伴うことが多い(Jefferson 1984)。

いっぽう、微笑みは、たとえ相手の発話中に発せられても、音声を打ち消すことはない。聞き手の微笑みは、話者の微笑みと重なるだけでなく、発話とも重なることができ、しかも発話をさまたげない。じっさい断片1に限らず、このあとに挙げる例でも、微笑みの重なりは、哄笑の重なりで見られるような発語の修復を引き起こしていない。

微笑は、視覚的に発話と並行して調節にあずかる点で、哄笑よりもむしろ視線に近いタイミング調節によって管理されているのかもしれない。

では、微笑と視線とは、じっさいの相互作用にどのように関わっているだろうか。

3.3 微笑と視線による参加者のカテゴリー化

断片1を今度は、視線と微笑の関係から見直してみよう。断片1でアズサはセリカと向き合っており、二人の視線はベニコからははずれている。そして、この時点で、ベニコは笑っていない。

さらに興味深いことは、アズサの発語が「あたしとセリカ」と、微笑み合いを達成した二人を挙げるいっぽう、この時点で微笑みを交わしていないベニコに言及していないことである。

じつは断片1には続きがあり、そのあいだに、三人の視線は以下のように変化している。

【断片1'】

01A: あたしとセリカ = めっちゃたべてるけど =
(視線と微笑)

- A: C ~~~~~
B: 閉 _____ 開 A _____ 下 _____
C: A ~~~~~ 閉 _____ ... B ~~~~~

(「閉」「開」はまぶたの開閉、「」は同じ方向の持続、アルファベットおよび他の漢字は視線の方向を指す)

ここで、注目すべきは、アズサの発語に対して、聞き

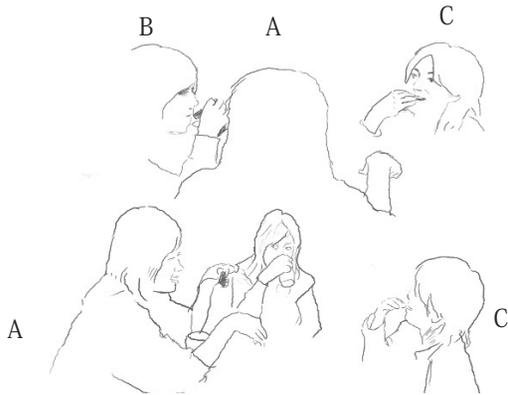


図2 断片1'でAが「あたしとセリカ」と言い終わった瞬間のA,B,C(下左から)の表情。A,Cは微笑み合い、BはAに視線をやっている。

手であるベニコとセリカの視線がそれぞれ異なるやり方で調節されつつあることだ。

ベニコは、アズサが「あたしとセリカ」と言い終わる直前(図2)に、アズサに視線を移し始めている。そして、アズサの視線がセリカに向いているのを見てから、アズサから視線をはずし、自分の下を見始める。

いっぽうセリカの視線も、アズサの発語とともに変化する。アズサの発語にはまだベニコの名前が挙がってないにもかかわらず、セリカの視線(および微笑)はベニコに向けられている。

アズサとセリカの間のみで微笑がかわされていること、そして、アズサの発語の中にベニコの名前が挙がらぬことから、二人の聞き手は、この短い発語がベニコの不在を投射していることをいち早く察知する。そして、ベニコは発語の完了を待たずに下を向き、セリカはベニコに微笑を向けているのである。

断片1'はさらに以下のように続く。

【断片1'】

01A: あたしとセリカめっちゃたべてるけど=

02A: =ベニコあんまり食べへ[んな]

03B: [え食]べてるよ:

((視線と微笑:102-03))

A: B

B: 下

C: B

アズサは、1行目では語られていなかったベニコの名前を挙げながら、ベニコに視線と微笑を向け直す。このときすでにセリカはベニコに視線と微笑を向けている。この結果、1行目で視線と微笑を交わし合っていたアズサとセリカは二人とも、ベニコに視線と微笑を向けたことになり、いっぽうベニコは二人に微笑まれながら下を向いている。

1-2行目のアズサの発語を見ると、その発語内容によって、参加者は「食べる人」(アズサ、セリカ)と「あ

んまり食べない人」(ベニコ)にカテゴリー化されているように見える。

しかし、カテゴリー化は発語内容のみによって行われているわけではない。発語よりも前に、微笑と視線の関係によって、アズサとセリカが微笑を交わし合う者同士としてカテゴリー化されている。

さらに、微笑は、単にカテゴリーを作り上げるだけではない。微笑は、カテゴリー化されなかったベニコに向け直され、一時的に作られたカテゴリー(アズサとセリカ)から、カテゴリー外(ベニコ)へと働きかける装置として機能し始めているのである。

3.4 微笑みによる招待と拒否

Jefferson (1979)は、哄笑の招待に対して、受容と拒否の二通りがあることを示している。微笑に対する反応にも「拒否」と考えられるものがある。これを哄笑の場合と比較してみよう。

【断片3: 居酒屋】

(アズサはおもしろくて手頃なバイト先がないか悩んでいる。ベニコから「コンビニは?」という提案が出たがアズサは「(給料が)安いやん」と否定する。その後1行目のCの発話が続く)

1 セリカ 居酒屋

2 (0.8)

3 セリカ [.....][.....][.....]=

4 アズサ [0.4][首を左に][首を戻し視線を下に]

5 セリカ = [[[視線を上)]]]

6 アズサ [[[視線をCに)]]]

断片3では、1行目のセリカの(バイト先候補の)提案に対して、0.8秒の沈黙が続く。セリカはアズサに向かって微笑みを開始する。この微笑みに対して、アズサは0.4秒の無反応のあと、首を左に倒し(図3左)、さらには首を戻しながらセリカから視線をはずして下を向く。この間、セリカはずっと微笑みを維持している。

アズサとセリカの非言語行動には、発語行為に似た構造がいくつか見られる。

まず3行目のセリカの微笑みに注意しよう。2行目の沈黙は、非選好的な応答が投射されるときに典型的な現象である。このような沈黙のあとで、第一話者はしばしば、前の発話のバージョン version を発する(Davidson 1984)。セリカの微笑みは、通常ならばバージョンが発せられそうなタイミングで起こっている(3行目)。この微笑みじたいには、明示的な指標は含まれていない。しかし、微笑みには、声とは異なり、顔の向きが伴うた

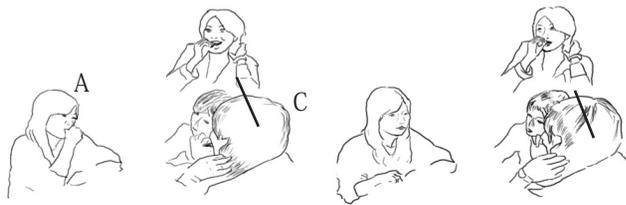


図3：断片3の4行目でCの微笑に対しAは首を傾げる（左）。その後、AがCに顔を向けた瞬間、Cは上を向く（右）。

め、より受け手を強く指定する。受け手にとっては、1行目から3行目への表現の移行は、通常提案からより強くアズサを受け手として指定したバージョンへの移行として解釈されやすいだろう。

3行目と並行して起こっている4行目のアズサの応答は、声を伴わないが、そこには声を伴う場合と同じ特徴がいくつか見られる。まず、微笑みに対する0.4秒の遅れである。これは、非選好的な応答に特徴的な遅延と言えるだろう。しかも反応には笑いを伴わず、首を傾げている。ここでは、遅延と非言語内容の両方によって、一種の拒否 *disclimation* が示されていると言えるだろう。

5行目でセリカが微笑みを止めて上を向く行為（図3右）も発語による相互作用と類似している。1-4行目を、セリカの提案→アズサの拒否ととらえるなら、5行目はいわば、提案-評価の隣接ペアに対する評価 *assessment* と言えるだろう (Schegloff 2006)。

このように、前の発語と関連する微笑みには発話によるやりとりと類似した会話分析的構造が見つかる。

しかしいっぽうで、断片2の微笑みには、声を伴う笑いとは異なる特徴も見られる。

セリカの微笑みは異様に長い。もし、これが哄笑であったなら、相手の拒絶的な応答に対してひたすら笑い続けるのは難しいだろう。

ただ長いだけではない。セリカの微笑は、アズサが拒絶の身振りを終えてセリカのほうに顔を向ける瞬間に停止する(3-5行目)。これは哄笑の場合とは大きく異なっている。哄笑が相手の拒絶にあったときには、その哄笑はすばやく停止されることが多い (Jefferson 1979)。それに対し、ここでの微笑は拒絶のあとも維持され、アズサが再びセリカに顔を向けたところでようやく解消される。セリカは、ただ拒絶に対する応答として微笑みを停止しているのではない。微笑の終結点を、アズサに見えるタイミングまで引き延ばし、上を向く行為と連鎖させ、自らの評価を相手に可視化しているのである。

4. おわりに

本論では、微笑と哄笑との違いについて、特に微笑の視覚的側面に注意を払いながら比較してきた。その結

果、微笑では、必ずしも前の発語に対する招待や評価が伴うわけではなく、むしろ後に新たな話題や発語を伴う場合があることが確認された。また、微笑は受け手を強く指定することで参加者間のカテゴリー化に関わりうることで、発語と並行しながら微笑どうしの受容や拒否が進行しうることも確認された。

Jefferson (1979) は、多人数会話の哄笑例を挙げているが、いずれも話者が他の参加者全員を笑いに誘う例であり、特定の参加者が笑いの受け手として招かれている例は挙げられていない。これは、哄笑の音声は、受け手を特定しにくいメディアだからかもしれない。

今回は限られた事例を紹介するにとどまったが、実際には、ここで論じた以外に、微笑と哄笑が複雑に関係しあう連鎖も観察された。それについては機会を改めて論じたい。

参考文献

- Davidson, J. (1984). Subsequent versions of invitations, offers, requests, and proposals dealing with potential or actual rejection. In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 102-128.
- Goodwin, C. (1981). *Conversational Organization*. Academic Press, NY.
- Jefferson, G. (1979). A Technique for Inviting Laughter and its Subsequent Acceptance/Declination. In *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. G. Psathas, ed. New York: Irvington pp. 79-96. Publishers.
- Jefferson, G., Sacks, H. and Schegloff, E. A. (1987). Notes on Laughter in the Pursuit of Intimacy. In Graham Button and John R. E. Lee (Eds.) *Talk and social Organisation*. Clevedon: Multilingual Matters pp. 152-205.
- Kendon, A. (1967). Some Functions of Gaze-direction in. *Social Interaction, Acta Psychologica*, Vol. 26, pp. 22-63.
- Schegloff, E. A. (2006). *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge University Press.

連絡先 細馬宏通 〒522-8533 彦根市八坂町 2500
滋賀県立大学人間文化学部 hhosoma@shc.usp.ac.jp